

大雨によって引き起こされた直接交渉

工藤太地*

2019年8月11日、フィールドワークを開始して初めて迎える日曜日の朝、NGOの事務所に併設されているゲストハウスに滞在していた私は、外の騒がしさに目を覚ました。毎週日曜日には、住民は仕事を休み、家でゆっくり休日を過ごすと思っていたのだが、その騒がしさから外で何かが起こっていることを察した。程なくして、部屋のドアの向こうから私を呼ぶ声が聞こえた。

「起きろ、タイチ！ペンと紙を貸してくれ！」

ドアを開けると、私のリサーチ・アシスタントを務めるS氏が立っていた。着替えて部屋を出ると、彼と同じ村の住人がNGOの事務所に集まっていた（写真1）。



写真1 朝からNGOの事務所に集まる村人

ニルギリの豪雨

この出来事は、インド南部タミル・ナードゥ州ニルギリ県で活動するあるNGOの事務所の敷地内で起きたことである。私は同県に在住するパニヤーンという社会集団の社会上昇の実践について研究しており、医療サービスや職業技能訓練、雇用創出活動などを通じてパニヤーンに対して支援活動を行なうNGOと協力して、調査を進めていた。この騒動は、2019年8月に発生したニルギリ県の豪雨災害に端を発していた。

調査を開始した8月の初旬のニルギリは、雨季のただなかで、連日大雨が続いていた。特に、今年の雨量は例年以上に多く、タミル・ナードゥ州の24時間あたりの降水量記録が、ニルギリ県のアヴァランチェ（Avalanche）という地点で76年ぶりに更新された [Skymetweather 2019]。州政府災害管理局は特別警報を発令し、災害救助チームが被災地に派遣される事態にまで進展した。地元メディアによれば、ニルギリ県では、死者が6人、避難者が1,500人以上にのぼり [The Indian Express 2019]、テレビの報道番組では、洪水や土砂崩れによって家族を失った者や避難キャンプでの生活を余儀なくさせられた住人の悲痛な姿が画面に映し出されていた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

パニヤーンの住居問題

私が研究対象とするパニヤーンも、豪雨の影響を受けた人々であり、それは特に住居に関することであった。パニヤーンは、州政府によって指定部族 (Scheduled Tribes) に指定されている。指定部族とは、文化的独自性、社会経済的後進性、隔絶度の高い居住の点から州政府によって認定されるコミュニティの総称であり、認定を受けた社会集団は、政府よりさまざまな支援やサービスを受けることができる。指定部族への政策のひとつとして、タミル・ナードゥ州では、政府が指定部族に対して住宅を提供している。それに加えて、調査地では NGO が住宅提供を行なう場合もみられた。

住居は、人々にとって重要な生活資源である。それでは、そうした住居提供の制度があるなかで、住居は実際に住民のもとへ行き渡っているのだろうか。フィールドワークを進めるうちに、村によって住居の分配に偏りがあることに気付いた。

パニヤーンの住宅状況は主に 3 つに分類され、(1) 過去に政府や NGO から提供された、雨風を十分に防ぐことができるコンクリート製の住居、(2) 過去に政府や NGO から提供されたが、その住居自体が経年劣化し、壁や屋根に欠損がみられ、雨風をしのごには十分でない住居、(3) 住居提供を受けておらず、泥や草木、ビニールシートなどを使って自らが建てた住居、となる。

それでは、なぜ村によって住居の分配が偏ったのであろうか。村人への聞き取りで最もよく耳にしたのは、村の地理的な立地に関

する言及であった。住居が提供されていない村は、車が通過できる道路に面しておらず、また村まで歩道が整備されていないことが多かった。村人によれば、建築資材を搬入することができる道が整備されている村から優先的に住居提供を受けることができるため、道路が整備されていない村に住む自分たちはいつも後回しにされるのだという。仮に住居が提供されたとしても、決して質が良いものとはいえず、10 年ほど住むと、壁や屋根の欠損が多く生じるという。上記の分類で (2) や (3) にあたる住居に暮らす者たちは、行政の末端組織である村民総会 (Gram Sabha) に出席し、住居提供やその再建を何度も要求しているようだったが、それによって状況が改善するには至っていないようだった。

こうした雨風を十分にしのぐことができない家に住む人々こそ、連日の豪雨で生活が脅かされたのだった。

怒りの限界に達した村人、直接交渉へ

では冒頭のエピソードに戻るとしよう。私のリサーチ・アシスタントである S 氏が私の部屋を訪ねたのは、連日の大雨とはうって変わって、久しぶりに青空が見えた日曜日の朝であった。朝から村人たちが NGO の事務所に押しかけている理由を S 氏に尋ねると、

「連日の大雨でみんな我慢の限界なんだ。家の建て替えを求めて、みんなで抗議することにしたよ。」

と返答された。彼と同じ村の人々は、上記の分類では (2) に該当する住居をもつ者が多く、連日の大雨によって、屋内まで浸水した



写真2 大雨によって倒壊したバナヤーンの家

者や、家そのものが倒壊した者まで出ていた。

これまで NGO や行政職員に何度も家の建て替えを求めてきたが、その場では対処するという口約束が結ばれるだけで、実際の建て替えは全く進んでいなかったという。こうした事情のなか、連日の大雨によって住居問題が顕在化し、村人の怒りは沸点に達した。村人総出での直接交渉に乗り出したのだった。

NGO 職員はすぐに村職員 (Village Administration Officer) らを呼び、一行が事務所に到着した。その後、話し合いが始まった。村人は強い口調で村職員に詰め寄り、村の全戸の建て替えを要求し始めた。すると村職員は、予算にも限界があるから全てはできないと言う。

「予算には限りがありますので、20 戸しかできません。被災した村人のリストを作って、こちらへ提出してください。そして、緊急措置として、食べ物と家の損害に応じた財政支援をします…私だって自分のポケットマネーからお金を出しています。キリスト教会からも防水シートを買うための資金を寄付してもらいました。事態は早急に解決できない



写真3 村職員に対して、住宅再建を交渉する村人たち

ので、あまり騒ぎ立てないで下さい。」

村人の強い要求に対して、村職員はなんとかその場をおさめようとしていた。それは、直接交渉の結果、村人が資源を獲得した瞬間であった。最終的に、緊急支援と雨季が終わった後に新しく 20 戸の住居が村に建てられることが約束されたのだった。その後 S 氏は、私が貸した紙とノートを使って、被災者リストを作成していた。

この一連の出来事から、村の草の根のレベルにおいて、行政が提供する資源がいかにか村に分配されるのか、その一端を理解することができた。

「タイチが次に村へ来た時は、新しい家が建っているだろうな。」

交渉を終えた S 氏の表情は、満足感に満ちていた。

引用文献

Skymetweather. 2019. <<https://www.skymetweather.com/content/weather-news-and-analysis/record-rainfall-in-avalanche-region-of-nilgiris-tamil-nadu-76-year-old-record-broken/>> (2019 年 8

月 9 日)

The Indian Express. 2019. <<https://indianexpress.com/article/cities/chennai/nilgiris-floods-heavy-downpour-kills-six-near-avalanche-5905118/>> (2019 年 8 月 14 日)

北タイ、山地の生活とグローバル化のダイナミクス

—少数民族アカとコーヒーとの出会いを経て—

奥野 衣莉香*

驚いた。北タイでのコーヒー栽培がこれほどまでに盛んになっているとは予想していなかった。それも、一般的な食堂などで売られているミルクコーヒーや、甘いブラックコーヒー（ウーリアン）などとは違う、本格的なコーヒーに出会う機会が多いのだ。

チェンマイ市内の街を歩けば、いたるところにカフェがあり、ほとんどの店が内装のデザインに凝っている。また、「北タイ産」「アラビカ 100%」をうたうカフェ、山地の少数民族が作ったコーヒー豆を使用していることを強調するカフェ、世界大会で上位成績をおさめたバリスタがいるというカフェ…商品に対しても各々がさまざまなこだわりをもって、中でも私は、北タイのコーヒー栽培の多くが山地の少数民族によってなされている

ということに強い関心を抱いている。それは、現代に生きる彼らがグローバル化の波に大きく影響を受けていることの証左である。

本稿では、アカの人々との出会いで得た経験を中心に、そこにみたグローバル化の影響について述べることとする。

アカの人々との出会い

2019 年 8 月、私はチェンマイを中心に約 5 ヶ月間の滞在を始めた。フィールドワークの最中はアカの人々と接する機会が多かった。きっかけは以下のとおりである。

チェンマイには市内を中心に観光客向けの大きな市場がいくつかあり、その中のひとつにアヌサーン市場がある。そこでは観光客向けの土産品を販売する店が所狭しと並んでい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 彼女の出身はビルマで、カンチャナブリやブーケット、バンコクを経て、チェンマイで自分の店をもつことを考えたという。チェンマイでは 19 年間、店を営業している。常設の比較的大きな店舗である。興味深いことに、商品にアカの手芸品はなく、ほとんどがモンの工芸品だという。